

[成果情報名] 施設トマト栽培における天敵「オンシツツヤコバチ」の放飼方法

[要約] 施設トマトの害虫「オンシツコナジラミ」に対する天敵「オンシツツヤコバチ」による防除は、半促成栽培では黄色粘着板への害虫の誘殺量に基づくモニタリング方式とし、抑制栽培では植付け計画に基づくスケジュール方式とする。天敵の放飼は、半促成栽培では害虫の初確認時から、抑制栽培では定植時から7日間隔で4回行う。これにより慣行防除と同等以上の防除効果が得られる。

[キーワード] 施設トマト栽培、オンシツコナジラミ、オンシツツヤコバチ

[担当] 山梨総農試・栽培部・作物病害虫科

[連絡先] 電話 0551-28-2496、電子メール sougonoshi@pref.yamanashi.lg.jp

[区分] 関東東海北陸農業関東東海・病害虫

[分類] 技術・普及

[背景・ねらい]

施設トマト栽培農家は難防除害虫の一つであるオンシツコナジラミに対し、市販の導入天敵「オンシツツヤコバチ」の活用を試みているが、防除効果があがらないために問題となっている。そこで、施設トマトの半促成栽培および抑制栽培における「オンシツツヤコバチ」の有効的確な放飼方法を明らかにした。

[成果の内容・特徴]

1．半促成栽培

- (1) オンシツツヤコバチの放飼は、施設内に黄色粘着板を設置してオンシツコナジラミ成虫の誘殺量を把握した後に放飼時期を決めるモニタリング方式が効果的である。
- (2) オンシツコナジラミの防除効果は、成虫の初確認直後から7日間隔で4回、オンシツツヤコバチを放飼することにより慣行の薬剤防除と同等以上となる(図1)。

2．抑制栽培

- (1) オンシツツヤコバチの放飼は、定植と同時に開始するスケジュール方式が効果的である。
- (2) オンシツコナジラミの防除効果は、トマトの定植と同時に7日間隔で4回、オンシツツヤコバチを放飼することにより慣行の薬剤防除と同等以上となる(図2)。

[成果の活用面・留意点]

- 1．施設開口部(側窓・天窗)に防虫網を設置し、オンシツコナジラミ以外の害虫の侵入を防ぐ。害虫が発生した場合は、BT剤やIGR剤などの天敵に影響がない薬剤で防除するか、影響がある薬剤を使用する際はスポット散布を行う。
- 2．オンシツコナジラミにより「すす病」が認められた場合は、直ちにオンシツツヤコバチによる防除を中止して薬剤防除に切り替える。
- 3．下葉かき作業の際には、オンシツツヤコバチが寄生したマミーを捨てないように1週間~10日ほど下葉を株元やベットの下に放置してから廃棄する。
- 4．1作分(4回)の放飼にかかるコストは2万円/10a程度(送料別)である。

[具体的データ]

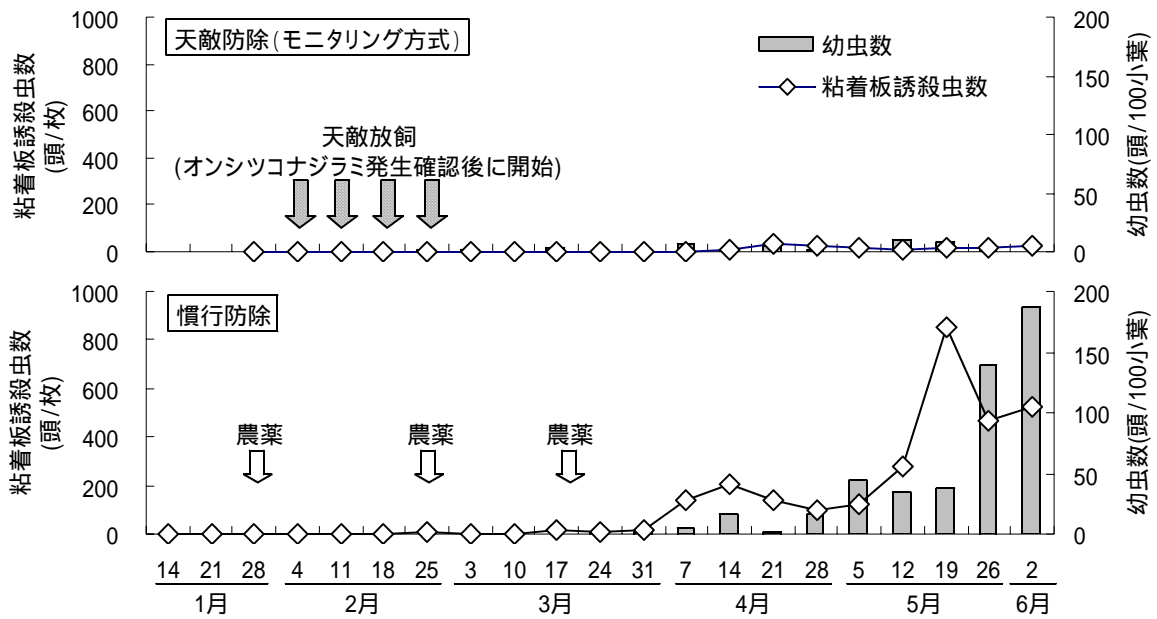


図1 モニタリング方式の天敵放飼によるオンシツコナジラミ発生状況 (半促成栽培・2004年)

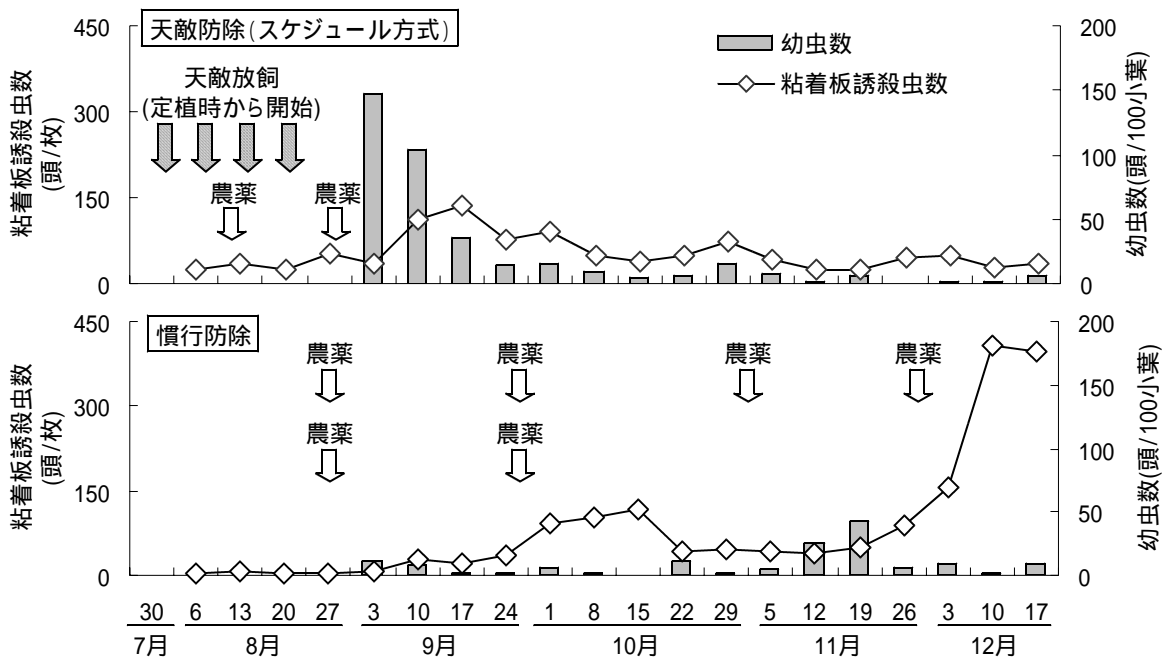


図2 スケジュール方式の天敵放飼によるオンシツコナジラミの発生状況 (抑制裁培・2004年)

[その他]

研究課題名：減農薬栽培における病害虫防除技術の評価・開発

1 施設栽培トマトにおける減農薬防除技術の評価

予算区分：県単

研究期間：2002～2004年度

研究担当者：内田一秀、山口優子、舟久保太一、國友義博